



~4
2915
2915

新古今和歌集卷之十六
報方上



入道前関白大臣家一百首奇なり
ゆりけりし幸甚なり
平治の御時より昔報方
立御内大臣家残書なり
藤原有家親臣
山陰の御時より

為難院の御時より
治承の御時より

一条の御時

長子より昔方より
為難院の御時

月全の御時より
昔方忠松の御時

月全の御時より
大僧正の御時

長子より昔方より
昔方忠松の御時
昔方忠松の御時

管梅と云は其の如し
雷一所が号の

梅と云り

市の雷一色も也
梅の花号の
枇杷在古に成り
梅

と云り

貞信云

にけるはめ
梅花を極と云
延長の時
院兼平八年
のつりけ
日梅の

延長の時
院兼平八年
のつりけ
日梅の

のつりけ
日梅の

源云
梅花

り
梅花

梅花と云

花山院

色
梅

上東門

大貳三位

梅の花
東三条院

東三条院

と云り

此うすけり

金剛橋の堅固

まじりておぼしきなりけり

西の

金剛院の方

葉の甲にしろみえき春霞のまじりておぼしきなり

柳

菅原藤原の政家

今らの屋の栞木は柳のまじりておぼしきなり

此

深巻の文

ひよりのまき若のまきりけり

堀河の院の栞木は柳のまじりておぼしきなり

金剛院の方

まじりておぼしきなり

西

左大將の元

おまじりておぼしきなり

高陽院の栞木は柳のまじりておぼしきなり

肥後

方代にしろみえき春霞のまじりておぼしきなり

二条院の院内

枝のまじりておぼしきなり

世の建く長百首奇くしきり時記の行は

白く居る全史後成

今我の世は花はと十の地と見え入りたるを

い入道前開白く政長家のう合し

去られた世と多しははが花とくは

回家百首奇し

然月と中のかえりたる世はくちけり

春の比木余院くちけり

大儒正慈矣

見せむと志がたき入るる事案の世はの世

世

は案のく白く心むけりわいあまえりり

西行法師

世とくちかちか花の世はくちけり

東くちかちか花の世はくちけり

春の比木余院くちけり

東は師

世の建く長百首奇くしきり時記の行は

形入す

後梅羽長

梅の白の浦のまきつり又八代よめあはれ梨の花

梅の若伴お長くらの園くまりてゆりけ舟

しつるまきつりか賀奈門

ま浪乃布ま末の松の花やまの春はあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

あけつるあまのまの松花のまのあけ

八重きく色にかりね歎みの内と九枝んさきすをりし

いぬ 香融院の方

此身よりそつてしほしほあつらふらつとふれんが

ひきすき首うらふらつとふれんが 前大備正意者

あつらふらつとふれんが 田子のあつとふれんが

世の事そつてあつらふらつとふれんが 徳島大正意者

あつらふらつとふれんが 徳島大正意者

あつらふらつとふれんが 徳島大正意者

あつらふらつとふれんが 徳島大正意者

あつら 赤木門院

唐衣の化つらわらふ事のあつらふらつとふれんが

同月余日そつてあつらふらつとふれんが

あつらふらつとふれんが

あつらふらつとふれんが

あつらふらつとふれんが

あつらふらつとふれんが

あつらふらつとふれんが

あつらふらつとふれんが

時評の... 後成

舟内平尾の雨... 花山院の... 船

舟内平尾の雨... 妻子女王

舟内平尾の雨... 和泉武部

舟内平尾の雨... 七条院大納言

舟内平尾の雨... 中務

舟内平尾の雨... 紀有岸船長

紀有岸船長

昔やうの病やゆつとすまてあつた海の方より有け
おきかたき時のかりまて七月廿三日の月と申り
手におもふうとくつとあつたをゆりける

は
三條院の方

光りまて今もまねたつたあつたまてあつたの月
あつた酒まてあつたあつたあつたあつたあつた

三條院の方

月影のまてあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

右原存時

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

中務少輔眞年親王

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

作樂方太輔

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

冬後三光

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

三井寺のぬりてゆくとけいしんふり
句にてりふりけり
秋の乾色

月夜にささるるのすく早きけりこの露のたけ

ふいふりのたけけりといふさのけり

けりといふさの 法下群賢

思ひかたもあはれさるる人さるる月

月夜にささるるのすく早きけりこの露のたけ

けりといふさの 法下群賢

思ひかたもあはれさるる人さるる月

月夜にささるるのすく早きけりこの露のたけ

けりといふさの 法下群賢

思ひかたもあはれさるる人さるる月

けりといふさの 法下群賢

思ひかたもあはれさるる人さるる月

けりといふさの 法下群賢

思ひかたもあはれさるる人さるる月

けりといふさの 法下群賢

思ひかたもあはれさるる人さるる月

けりといふさの 法下群賢

あはれにえんをうへんをの月を

懐柔のうへん 左近中将云衛

あはれにえんをうへんをの月を

百首うへんをの月を

あはれにえんをうへんをの月を

月前休懐のうへんをの月を

藤原経通朝臣

あはれにえんをうへんをの月を

あはれにえんをうへんをの月を

あはれにえんをうへんをの月を

あはれにえんをうへんをの月を

あはれにえんをうへんをの月を

あはれにえんをうへんをの月を

深道所

あはれにえんをうへんをの月を

あはれにえんをうへんをの月を

儒者法師

あはれにえんをうへんをの月を

能定親臣大和國守りとの心くすむげの
あけし海うてありよりくれいりしりり

らんて次

そむらうへりらむせむせむ水清の月今

百首をまうりし時

栲波大盛臣

月今からのえらむれあて栲波大盛臣を
五十そり方とまうりし時

前大備正意

栲波大盛臣をまうりし時

栲波大盛臣の時月の奇あまを授けり
あとの月のかまきとえそん那奇栲波大盛臣

栲波大盛臣

そむらうへりらむせむせむ水清の月

和方よりて海に清月をまうり

鴨長明

あまの月をまうりし時
徳野よりてけり

右京秀純

秋のふり本葉はうつら枯れしを

月と四方のうらみとて文をよみて

正月のうらみ

か免候わすれぬ秋のふり

題

花山院のうら

晴の月々々々々々々々々々々々

作勢

あつめ候えりしとて

秋泉式部

すまひ人親をわび候に

大納言經信

月並水とてうらみ

秋のふり痛をうらみとて

くはまのうらみとて

後成

あつめ別枯とてうらみ

題

西行法師

月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる

中着きりし者、
 前備之巻、
 左京道經、
 右京道經、
 千五百番り合、
 二乗院横紋、
 世にこそある人、
 月々平しくあるは秋も秋も平らなる

しりり

弄起法師

あつめ月と糸と紐ゆらさし海の友と雲をた

山里とく月の夜もやこいし

つとらこいし
大に嘉云

山やこいしあつめ月と糸と紐ゆらさし海の友と雲をた

ち丹のつとらこいし
或子

内親王と
惟の親王

あつめ月と糸と紐ゆらさし海の友と雲をた

或子内親王

有のつとらこいしあつめ月と糸と紐ゆらさし海の友と雲をた

春日社の哥
梅のつとらこいし

梅のつとらこいし
梅のつとらこいし

あつめ月と糸と紐ゆらさし海の友と雲をた

右大将志經

あつめ月と糸と紐ゆらさし海の友と雲をた

若原保秀

あつめ月と糸と紐ゆらさし海の友と雲をた

月のつとらこいし

和奇下々方合之海邊の月と云ふこと

大備正意矣

和の浦月丸るあふ午ゆりあふ遊の美さ

定家那良

市もまじ神の月定家那良のあふあふあ

若原秀能

の石のこをの以物袖と見よすら月七の地

海邊眺をいふ心 源具親

あふあふとあふくあふあふあふあふあ

八十歳をいふあふ 俊成

あふあふとあふくあふあふあふあふあ

千五百番重なり

あふあふとあふくあふあふあふあふあ

あふあふとあふくあふあふあふあふあ 西行法師

あふあふとあふくあふあふあふあふあ

あふあふとあふくあふあふあふあふあ 守光け親王

あふあふとあふくあふあふあふあふあ

あふあふとあふくあふあふあふあふあ 左衛門督通光

おきちの袖に栴 栴の裏にすゝめ髪とて院

後成女

昔乃葉のくえのうまの世にすゝめかこの栴に

祝了成伴栴

其の裏にすゝめを葉のくえのうまに栴に

は城の入道前ちのうまに女房の栴とて

多しじのうまに栴に

業中郎

そのうまに栴にすゝめを葉のくえのうまに

如

白雲のくえのうまに女房の栴とて

如

雷祿好巻

そのうまに栴にすゝめを葉のくえのうまに

栴にすゝめを葉のくえのうまに

女法師

そのうまに栴にすゝめを葉のくえのうまに

栴にすゝめを葉のくえのうまに

如

中細云匡房

杖さつらつめりてさしめしき月の夜と見ゆ

崇徳院為とす 大光の行宗

花すき杖の葉集し歌のしるしと我す之をん

と里すすすは流しすく物中地云原さく

りうらうす 後徳寺在る

舟中梅の風しりまてさすかむ杖のしるし

中細言瀧長

世に梅をぬれぬ歌のしるし月の方のこれす

常とすのりうらうす 此泉院也

のうらうら梅さむい早にさすき首はりの歌

長月のはれはあふれし

源順

ありふおのまふ杖さつらつ花のあつ月とあつ

らんす

山行乃若の杖さつらつりてさすりさるる花の歌

百首方とすりうらうす

物にさしきり水梅を分て為し所あるたれ

寂勝四天王院障子とありてすりうらうす

家隆御后

君代を陽に埋木とこりのきこまの終り
元浦のじりすまゆりけり家のついで
清少納言すまゆり可雷のこく作けり
他こそ儘すまゆりそゆりまゆり

赤津末門

伝となく雷はまゆりまゆりまゆり
心もなまゆりまゆりまゆり
後白河院景

霧のなきまゆりまゆりまゆり

宇雷迷懐た

後成

松のまゆりまゆりまゆり
松のまゆりまゆりまゆり

米雀院

とんぼのまゆりまゆりまゆり
とんぼのまゆりまゆりまゆり
とんぼのまゆりまゆりまゆり

とんぼのまゆりまゆりまゆり
とんぼのまゆりまゆりまゆり

何れもたゞく是れを中としは其の終るるを

佛形宣旨

乃、其の終るるを中としは其の終るるを

其の終るるを中としは其の終るるを

其の終るるを中としは其の終るるを

其の終るるを中としは其の終るるを

其の終るるを中としは其の終るるを

其の終るるを中としは其の終るるを

其の終るるを中としは其の終るるを

[Faint, mostly illegible handwritten text on the left page]

新古今和歌集卷第十七

新古今中

朱鳥五年九月紀伊國上り幸の時

河邊守

三つ浪のなほ松枝は年白草のや成てよ平城會

此

孝之守合

山城の若國は小波のなほや京をたつて馬のたつた

業平朝臣

色は金にさめぬ梅のさかへぬ花のさかへぬ

用汲秋風とて事なき物ぬち政志長

人すゝめは破れせき心の板をゆきまのらへて

赤石浦とて 源賴朝臣

わらふと舟長梅はなと浦をさくらりぬ月とて

地とてのつと 彦道法師

わのつと松の葉うとささしと指がぬゆあひ

千五百番方合と 正三位季純

水の江にや文祿のひそくひあやうと浦の松を

海邊のつと 左原季純

延

貫之

世を成す松をひりとりまの後の子にまを
ひたの舟宮をくくつりゆきてたすむれ

女御被下す

あまの浦を返らすむねはくわ

大貳三位にたけりけり

後次東院

ゆきつりすきりまのたむらひ

大貳三位

すなはちあまのついでにまのむすめ

教長にまのついでにまのむすめ

祝教成仲

地を返すまのついでにまのむすめ

百をえりまのついでに

無事におまのついでにまのむすめ

海霞とまのついでに

又まのついでにまのついでに

まのついでにまのついでに

皇太后御成

まゝそを成さむとて為りしは嫌の事ありしに

伊勢の御成

西行法師

あつては世にやにち捨てしと成りしは

正

前大僧正

世に成たるといふは當方様と成りしは

あつては世にやにち捨てしと成りしは

西行法師

風吹くは雲の様にまきまきと成りしは

四月の雲と云ふは此の雲と云ふは

業平朝臣

あつては世にやにち捨てしと成りしは

正

左京元方

春林と云ふは此の春林と云ふは

辛くも云ふと云ふは

前大僧正

花のそゝめは朱城を成りしと成りしは

正

西行法師

芳野と云ふは此の芳野と云ふは

有原家樹

いひてこれとて世うらり吉野城の松也

千五百番方合

左末の巻通具

くす地より信じて小松庵と名づかるゆゑに
山家送年といふべ

席巻法師

立出て信本より一行是れ少くも流成ゆ

住吉方合

太上天皇

石見山州より甲州ゆきたるなり世にたて

百三十三

上東院讃

あつた松若母の松心ありて年月を越せり

心家ねとつた

後成

といふてす本現き屋の松也といふこれのみ

去日 方合の松風

有家羽

いふてつた地をとり袖町をたれ松也

山寺の作り

道命法師

世にひき下りてまゝに地をいふ入屋か

少将弁のありたるなりといふ

和深武部

世とせひく方らばいふぬを 大原守

か 少将弁尼

あまのちういふ房海らうまけきぬの教とようか

あ 西行法師

くしんせえ長きぬんまはあはす身とくしぬの免

きりせぬれぬんかうしきしんぬるあり

教留院出補

かきぬの三輪法師の長をたておのり

法橋寺よりすしゆけかぬあしつてきぬれ

あといまきくぬれ 道氣法師

いんせんにまゐりのいふとえきぬ人のいふを

後白河院寺よりけりし約りのいふ

いんせんにまゐりのいふとえきぬ人のいふを

定家朝臣

いんせんにまゐりのいふとえきぬ人のいふを

あまのちういふ房海らうまけきぬの教とようか

いんせんにまゐりのいふとえきぬ人のいふを

そのはち將よりさしつゝ次の奉右官に成り
かつりて養ひしむる

東三條金吾松平
かれ世に有けりとの日活川のあゝあゝと歎き
あ

あつりあつせあけりあまのあゝあゝと
あ

あつりあつせあけりあまのあゝあゝと
あ

あつりあつせあけりあまのあゝあゝと
あ

あつりあつせあけりあまのあゝあゝと
あ

あつりあつせあけりあまのあゝあゝと
あ

あつりあつせあけりあまのあゝあゝと
あ

あつりあつせあけりあまのあゝあゝと
あ

實方朔也

天の河がし海本にそそ相橋あやう

海門院の四時百さうんまうけり

前中納言匡房

一本の梅を若しとらぬけりて成るぬん

天曆の時序風之國のふりてせし

一花多かりし 中務

はとたふれにふりてふりてふりて

在る

新

前大僧正慈光

ふりてふりてふりてふりて

西行法師

ふりてふりてふりてふりて

大僧正慈光

ふりてふりてふりてふりて

ふりてふりてふりてふりて

ふりてふりてふりてふりて

大僧正行基

いづれにてもいふ人の忠告を聞きし者なり
能くしりけりしと此後世にゆかりけりし

女法師

世に心もあつたれども昔の事を思ひぬ
西の法師百首をうたへしとせむ

所は昔の世に流しとていふは月と花
百首をうたへしとせむ

武子内親王

いづれにてもいふ人の忠告を聞きし者なり

小侍

櫻子と流しとていふは月と花

杉政左衛門

いづれにてもいふ人の忠告を聞きし者なり

兼経

新中納言のいふは月と花

後志は師も海りていふは月と花

いづれにてもいふ人の忠告を聞きし者なり

能くしりけりしと此後世にゆかりけりし

起てたはれの國なる等いありこゝろに
鳥より雀は長しえそそまのともうてのち
こゝろにたれと
西免法師

平めり西はらひはつるひは信ありし中果の徒
にぬらふあまのこけり
前大僧正慈因

平里よりあまのこけりしとくまはすしひんえと
後白河院に心をあてたむそまじ
延

あ元はらに黒上原に有りぬあまのこけり
式子内親王

連懐方
後成

いふもえんあまのこけりしとくまはすしひんえ
元めたはしりしとくまはすしひんえ

祝了成伴

のりし昔のものを思ふ事とて
前大僧正慈因

あつる里はあまのこけりしとくまはすしひんえ
西行法師

あつる里はあまのこけりしとくまはすしひんえ

たゞの心もなきとてきりかたきりな心もなきとて
まけと野とて一村かきりてまけと者もなきとて
昔もなまぬねと年ゆりる風のちかぬまきとて
年寺かきりてまけとけりけり坊とて
ち僧とけり

すまねれ我をいひはむあきらまねれ
百首うたてぬれけり
あきらまねれぬれけり
西行法師

こもく昔すこまな海まじきまな
この心まじりてまなまの
よりなまぬれけり

かげとてまなまな
西院のまなまな
まなまな
終国法師

まなまな
まなまな

おきまね宿

惠美法師

あはれ有りてを思ふよりあはれなき人の世に

困るのうらみ 定家朝臣

わが心も人の言をききしりなきは

ゆめゆめけしむらぬ人のあはれ

けしむらぬ 赤深末門

あはれなき人の言をききしりなきは

ゆめゆめけしむらぬ人のあはれ

あはれなき人の言をききしりなきは

天知天皇の方

あはれなき人の言をききしりなきは

あはれなき人の言をききしりなきは

新古今和歌集卷第十八

雜歌下

山

菅野大政大臣

足門のまのうらみあはれ初めとては
あはれ

日

あまのさか原のうらみあはれ初めとては
あはれ

月

月夜にさか原のうらみあはれ初めとては
あはれ

雨

心割りのやけあはれ初めとては
あはれ

霧

霧立ちぬるのうらみあはれ初めとては
あはれ

雷

花とらふとむねつらあはれ初めとては
あはれ

松

老ぬす松を緑まもりけりあはれ初めとては
あはれ

野

野にさか原のうらみあはれ初めとては
あはれ

今世の世に生れしは世に死すべしと云ふは
人死

人死

善悪の業を以て其の報に當りては世に生れしは世に死すべしと云ふは

能定期也

わが世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

此の世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

深ん

わが世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

此の世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

わが世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

此の世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

法性より前接致す

わが世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

此の世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

此の世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

東三条院

此の世の世に生れしは世に死すべしと云ふは

冷泉院と云ふは

より業平約長雪梅を布りつゝあはれをい
ふまゝてきて愛しとれうまひま
ゆきゆりすし
非高親王

夏水にまはる人丹は世とらふじつり
みやこのやうにさうらうい
そとさうらうけり人のかへにう
けり

女休徹子女王

甲おとさ房者りくすまのいれむつと
亭子院行りおはれ下三けり林有彦ん

伴執方

三つ流いとたえ守りおのろり林あり
殿上人をいれくしり
在原清正

中々名西の浦いふあはれと甲井と海あり
二条院喜捨傳ありけりての若じつと

思ひてく大納言経信まつりあゆりけり
の目まつりけり
らまん
次

右合行甲井の志やあはれとて若易守
寂勝宮天王院の侍子とあはれとて

三生忠見

この葉の中よりある一首の人と見えん

遊女の心はさうり 若忠の心

くもりはれぬおのれはうらむのうらむ

大紅翠周りとて致さるる草

きたてて舞いけり 赤深朱門

一葉してこの袖の襟もさあは海の流れに

林のさうりさけいど多し 河津の心

伊勢の大捕

一葉してこの袖の襟もさあは海の流れに

林のさうりさけいど多し 河津の心

秋風の巻せよとてさあは海の流れに

あかりさうりさけいど多し 河津の心

そとへあかりさけいど多し 河津の心

左大將所時

あかりさうりさけいど多し 河津の心

あかりさうりさけいど多し 河津の心

あかりさうりさけいど多し 河津の心

八月廿九日... 守光法親王... 疾道法師

世にまふれ... 正徳のころ

かろく... 急者

かろく... 右末門徒通具

彼... 定家朝臣

君... 家隆朝臣

その... 家隆朝臣

おのゝり身中 谷よりいづる義城ありて
世の中よりね月も枯風守りし神意あり

神經物也

君世の命より城をあれども
あまの守り切事あり

後成也

甲子の夜月ありて
あまの神に枯とて
千五百番多念し

朽敗ちぬる也

浮きもあじ世に
あまの守り切事あり
あまの守り切事あり

あまの守り切事あり
あまの守り切事あり
あまの守り切事あり

守えは親王

あまの守り切事あり
あまの守り切事あり

権中御云毎宗

世に
あまの守り切事あり
あまの守り切事あり

左近中侍云衛

あまの守り切事あり
あまの守り切事あり

及し... 源季宗

... 西行法師

... 中をう中...

... 意気...

西行法師... 西行法師山里...

... 兼仁法親王

... 儒正意...

... 前太極...

今この世に思ふに世をぬくはくして上は

世につれぬぬか 大に嘉云

今も其の心と欲て公にありて世にまじり

世 清慎云

世の世にあつては我方の心も世にまじり

皇嘉門侯

あはれを思ふに世にまじりては世にまじり

権中納言

世にまじりては世にまじりては世にまじり

世にまじりては世にまじりては世にまじり

世にまじりては世にまじりては世にまじり

後柳羽臣

世にまじりては世にまじりては世にまじり

世にまじりては世にまじりては世にまじり

去日社名合に 世にまじりては世にまじり

家隆羽臣

世にまじりては世にまじりては世にまじり

秋雨

中務具年親

お先づ秋の雨とて一日に朝の偏れありし

起 小野小町

木枯の空にうらみはしきこの葉のつらさを

木懐百首うらむけの紅葉とてしる

後成

嵐の先はくらの霞にふかき秋の心

起 景徳院のあ

福の秋の風とてうらむ長夏はれ

宮内

行かぬもやうらむ秋の心

和泉式部

ゆたかにての秋の心

あはれに秋の心

西行法師

ゆたかにての秋の心

起 後成

あはれに秋の心

百首并し

式子内親王

晴中あまをさるる春をのさるに福ありとて花
あまのさるとすふ成のさるる花より

和泉式部

あまのさるとすふ成のさるる花より

三

あまのさるとすふ成のさるる花より
徳野王のりてあまのさるとすふ成のさるる花より
あまのさるとすふ成のさるる花より

大徳正父書

あまのさるとすふ成のさるる花より

百首并し

五部内大臣

あまのさるとすふ成のさるる花より

百首并し

後藏

あまのさるとすふ成のさるる花より

百首并し

後頼朝

あまのさるとすふ成のさるる花より
あまのさるとすふ成のさるる花より

儒心通照

何れに於てよりかきし海をなすは

起

西行法師

えん枝よりまはるるの氣をさへて

あふ吹物やまきんもこころんこころ

赤深未の

あふ吹風いりまきん

和泉守のふらまきん

教道親のふらまきん

あふ吹風いりまきん

和泉守の

あふ吹風いりまきん

あふ吹風いりまきん

あふ吹風いりまきん

あふ吹風いりまきん

あふ吹風いりまきん

あふ吹風いりまきん

あふ吹風いりまきん

春 起

西行法師

おねをよめと云ふはこれにて病もさすわめや新

神流山月をよめと云ふはこれにて病もさすわめや新

伊勢の月よりこの秋もいりある月と云ふ

ふりかたの秋のあはれは中井の秋もさすわめや新

神祇のまじり 傳は意気の毒

吾れをよめと云ふはこれにて病もさすわめや新

云 健助はなをよめと云ふはこれにて病もさすわめや新

中院入道をよめ

美海り又よめと云ふはこれにて病もさすわめや新

入道前南無海百首をよめと云ふ

白太后をよめ

神風や卒徒川をよめと云ふはこれにて病もさすわめや新

後志法師

かみ風やまらぬ紫雲をよめと云ふはこれにて病もさすわめや新

守りてよめと云ふはこれにて病もさすわめや新

越前

神風や富の糸林をよめと云ふはこれにて病もさすわめや新

此より社ありのありせむにありて

社司より社をまつりてありてあり

天保七年

大田のりり社をまつりてあり

野社の方合をまつりてあり

鴨長明

存りてありてありてあり

年一のけりありてあり

中納言資伴

方代よりありてあり

女流文章ありてあり

入道前園

字よりありてあり

一家よりありてあり

後成

ありてありてあり

春日よりありてあり

大原のふりありてあり

けり 藤原行家

毒の火のくさしてあすお糸の縁の心算

寂勝の天王院障子も極山さくらの

ふとよりか 大傳心慈

そつと神のまはるとお集りあはれかけりぬら

日吉社とあまのうけの神

二宮

やうに社を極山さくらの心算

木標のさくらの

身たのしむる社の中をすくもる

あてり日吉社の中をすくもる

あてり日吉社の中をすくもる

あてり日吉社の中をすくもる

あてり日吉社の中をすくもる

あてり日吉社の中をすくもる

あてり日吉社の中をすくもる

あてり日吉社の中をすくもる

あてり日吉社の中をすくもる

大上天皇

若上はすき物にありす三熊野の試みありし事

新まふすりて川をりて

くはのりすもやぬるもはなすも人さるは海

の白河院然をまてまはけりしは

のくは塩釜のまはり 後述寺在在

善のりすのる人能くはまのくは福のり

熊野のりすもはりしは若代の王子に

の石とす付まてまはりしは

しとまてけりし事

若代命神にまはりし事

のりすもはりし事

大上天皇

若あはれまはりし事

か美守りし事

そりけりし事

若原道經

住名の人海松に

一品孫子因親を

身命のりすもはりし事

平

あつかりの河上より松葉のふらへりて世の人

んそけのそこの名をいこりていりり

日茂上人

あつかりの河上より松葉のふらへりて世の人

んそけのそこの名をいこりていりり

法皇上人

あつかりの河上より松葉のふらへりて世の人

備前源信

あつかりの河上より松葉のふらへりて世の人

天王寺の飛舟の氷とて

上東門殿

あつかりの河上より松葉のふらへりて世の人

法花経ニテ八束のちん

持入道前松葉のふらへりて世の人

あつかりの河上より松葉のふらへりて世の人

勅持のふらへりて世の人

あつかりの河上より松葉のふらへりて世の人

色々のせりてあやふくさうしめけりて

十業此のゆゑに中し中東東東

よりの

痛き所

しんまのちあはれあまのきんせとくぬき

さき事初開玉

乞ひしと世のまじりたてあはれ

あまのまじりてあはれあまのまじり

伎染不還玉

まじりてあはれあまのまじり

別楠結縁玉

牛比りのまじりてあはれあまのまじり

法華經二十八品のうらみあはれあまのまじり

唯有一余はのまじり

大徳正意名

くはれあはれあまのまじりあまのまじり

化城喻品 他作大城郭

うらみあはれあまのまじりあまのまじり

分別功德品 式位不退地

あまのまじり

勢の急をよみてはのちきて海を渡る切なる
水詰常不満と云ふは景徳院の号
甲を履てしよるは海を渡るの境ある
先照と云ふ

あまのふもよみはきりくはるる海を渡る
景徳院の号 水鏡家なる

金剛山に在る

世にきりくはるる海を渡るの境ある
功持なる 正三位何家





